

## 私の考える「普通」

高三

人権と聞くと、私の生活とはどこかかけ離れたもののように感じてしまいます。しかし、人権は難しいものでも堅苦しいものでもなく、誰でも心で理解し得るものであるはずです。

「人権」とは「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」あるいは「人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持つ権利」であり、だれにとっても身近で大切なもの、日常の思いやりの心によって守られるものだと私は考えています。しかし、残念ながら人権問題は尽きることはなく、度々ニュースでも見かけることがあります。この問題を解決するためにも自分から変えていくという思いが必要だと思います。

私が小学生のとき、特別支援学級の同級生と一緒に授業を受けていました。基本的に同じ教室で授業を受け生活するのですが、一日の時間割の中で別々の授業を受けることもありました。当時の

私は小学一年生で、その環境に対して何も疑問に思っていませんでした。ただ他に違うクラスで勉強することがあるというくらいに認識でした。しかし学年が上がるごとに障害があつて生活している人がいるということを知り、あの子たちは障害があつたのだと知りました。そこからテレビで見える機会があるたびに思い出していました。中学、高校と上がり自分の身の回りで関わる機会が減り、障害をもつて生活している人がいるということをお忘れかけていました。そんなとき、私にできることは何だろうと考える出来事がありました。

私がアルバイト先のカフェで注文を聞こうとしたときに、メニューをしばらく見た後スマートフォンでのメモ機能から注文をされたお客様がいました。私は一瞬、画面を見て固まってしまいました。私が、とつさに判断し紙にペンで書いて注文を受けました。そのとき私は「普通」は注文を口頭で受けてレジを通すことが当たり前だと思つて生きてきたので、一瞬でも不快な態度をとつてしまったと思ひ、すぐく申し訳ない気持ちでいっぱいでした。私が考える「普通」とはなんだろうと思つた瞬間でした。そのあと私はハンディキャップが

ある人のためにできることを考えていました。もし私が手話ができなくてスムーズに対応することができたら、お客様だけでなく多くの人と接するとき気分を悪くすることなく会話ができるなと思いました。

そんな中、国内初の聴覚に障害があり、手話でコミュニケーションをとるパートナー（従業員）の方が働くコーヒーショップが、二〇二〇年六月東京にオープンしていたことを知りました。ここでは、手話はもちろんメニューが分かりやすく表示されていて、指をさして注文することができず。もちろん筆談も可能です。加えて商品を取りやすくするために、受け取り番号が表示されたディスプレイが設置されています。注文後にも安心して受け取りまで待つことができます。またハンディキャップのない人、ある人、手話ができる人も、誰でも音声入力で注文をし文字がパートナーの方に表示されるので難なく伝えることができます。

このようなお店があることを知り、私はできないことなどないのかなと思いました。障害のあるなしに関わらず、一人一人の個性を引き出し、最大限の能力を発揮できる場所はすばらしいと思

ました。暗い出来事に焦点が当てられがちですが、このような明るく、前向きに仕事ができる環境があることは障害がある人にとってもよいことだと思います。なぜなら差別されることで居場所がないと感じてしまったり、自分を追い込んでしまったりすることが減ると考えたからです。

しかし、実際のところ自分の身の回りで起こる出来事がなければ、このように自分のことのように考えることはなかなかないと思います。私はこのアルバイト先での体験、経験がなければ、障害があり生活している人がいることを忘れていたかも知れません。それは、私が何の不自由もなく暮らせているという証拠でもあり、とても幸せなことだと思います。体験して分かることはたくさんあり、そのときに自分ができる精一杯のことを行えばそれでよいと思います。一番大切なことは、自分にとっての「普通」を過信せず、広い視野をもって生活することだと思います。ハンディキャップがあり生きる人にとってよい社会になるように、まずは自分の身の回りから変えていくべきだと私は考えます。